



鹿屋市立田崎中学校 田崎中だより

校訓「向学・協力・自律・奉仕」

第4号 令和5年6月7日

発行・文責：校長 竹崎 賢一

先週は2年生で修学旅行が、1年生で集団宿泊学習が行われました。わたくしは修学旅行隊に同行し、長崎県の原爆資料館やタクシー研修、佐賀県の宇宙科学館、福岡県の太宰府とPAYPAYドームでのプロ野球観戦、熊本県のグリーンランドを生徒たちとともに回ってきました。

若い頃にはあまり気にならなかったのですが、今回同行してみて、移動の時間が長いと感じました。単純に、もったいないなど。もちろん移動の途中で学ぶことや発見することもあるのですが、それは日常の中でも可能です。修学旅行のような、初めての場所や、仲間とともに過ごす中で味わう感動、驚き、喜び、そのようなものにもっと時間をかけられたらと思うことでした。

ベルトコンベアーに乗せられた修学旅行ではなく、なにか、もっと主体的・対話的な深い学びにつながる修学旅行ができないものかと。来年度以降、ぜひ実現を目指して働きかけてみたいと思います。

【部活動】

6月13日(火)から、令和5年度肝属地区中学校総合体育大会が始まります。本校の生徒たちも、それぞれの目標達成に向けて、精一杯練習を頑張ってくれたことと思います。結果も満足の度合いも、それぞれなのでしょうが、勝利を願って仲間とともに頑張る、そのことが何よりも尊いことだと思います。選手のみなさん、がんばってください。

さて、わたしは、生徒たちに部活動関連の講話をするときには、ほぼ「感謝」という観点で話をします。部活動をする目的は「感謝」することを学ぶ、まずもってこの1点にあるとわたしは考えているからです。部活動ができる、練習ができること、試合や発表会等に出られること、それは決して当たり前のことではなく、たくさんの人の献身があって初めて可能になることなんだということを噛みしめてほしい、そう考えるからです。

そんな、たくさんの人たちの献身への感謝の気持ちを試合で表現してきなさい、生徒たちにはそう話します。そのことが、優勝すること、上位大会へ出場することよりもはるかに価値のあることだと。

わたしは、部活動は「足るを知る」ということを学ぶ大切な場でもある、と考えています。「足るを知る」とは、中国の思想家「老子」の言葉で、「満足することを知っている人間が本当に豊かな人間である」というような意味です。

自分の好きな競技の部活動がある人もいれば、そうでない人もいます。自分が好きな競技の部活動があること、そのことは、その時点ですでに、そうでない人から見れば、十分に恵まれことなんだと知ることが大切です。

さらに、部活動が成り立つためには、顧問の先生が必要です。顧問の先生は、部活動の免許を持って教員になっているわけではありません。それでも生徒たちのために勤務時間外の自分の時間を使って練習に参加したり、土曜や日曜の週休日に練習試合や大会の引率を行ってくれています。それぞれの教員が、それぞれの事情を抱えながら、それでも生徒た

ちのために顧問を行ってくれています。顧問の先生がいてくれるだけで、それだけで、十分すぎるほどに恵まれているんだ、そのことを知ることは、とても大切なことです。

顧問の先生がいてくれること、それは決して当たり前前のことではありません。顧問の先生がいてくださるからこそ、自分が活動できるんだ、試合に出ることができているんだ、そういうことです。

各家庭でも、このような話をぜひ子どもさんにしてほしいと思うと同時に、保護者のみなさまも、保護する子どもを部活動に参加させるにあたってはまず理解していただくべきであると考えています。

前述しましたように、顧問の教員は部活動の免許を持って教員になっているわけではありません。また、部活動はオリンピック選手やプロ選手の養成機関ではありません。レベルの高い専門的な指導を求めるのであれば、その環境は自分で探すか作るかです。学校の部活動に求められても、その期待に応えるのは無理です。

本校の部活動規定には部活動の目的について、「学校の教育活動の一環であることを念頭におき、健康安全に留意しながら、技能及び技術の向上を図るとともに、自主性、協調性及び社会性を養い、明るく充実した学校生活に役立つものとする。」と謳ってあります。

本校の部活動は、この目的を今後も維持しながら、生徒たちの健全育成に寄与する活動として行って参ります。

子どもたちが、自分のがんばりを自分で褒めてあげたくなるような、仲間のがんばりに思わず涙してしまうような、そして、そのことを通して、その環境を準備してくれた関係者や保護者に感謝する、そんな体験を、そんな鳥肌が立つような感動を味わわせてあげたい、そう強く思います。自分に感動する、仲間感動する、そんな体験をした子どもは、必ずや人生を豊かに送ることができる。感動を味わう方法を学んだ子どもたちは、困難と向き合うことができる、そう信じています。